

## <ライブラリー> 聴覚障害児の教育

著者	長崎 勤
雑誌名	筑波大学リハビリテーション研究
巻	7
号	1
ページ	86-87
発行年	1998-03-16
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/10845">http://hdl.handle.net/2241/10845</a>

## 〔ライブラリー〕

### 聴覚障害児の教育

中野善達・斉藤佐和(編)  
福村出版 1996年

聴覚障害児教育は、今、大きな転機に立っていると見える。聾学校在籍児童の急減と統合教育の進展、「聾文化」論に見られる聴覚障害の概念自体の問い直し、人工内耳にみられるような聴覚補償テクノロジーの進展などである。そのような状況の中で、筑波大学大学院教育研究科のカウンセリング専攻リハビリテーションコースの聴覚・言語障害分野の元教授中野善達（現佐野国際情報短期大学教授）、教授斉藤佐和の両氏の編集による、聴覚障害児教育の現在と、今後の展望を見通す恰好の書が出版された。

本書は、Ⅰ聴覚障害の概念と教育の制度・方法、Ⅱ聴覚障害教育の実践、Ⅲ歴史と課題、Ⅳ資料からなっており、聴覚障害児教育の全体像を把握するのに、また入門にも最適であるが、それにとどまらない意義をもっている。

聴覚障害児教育はフランスで開始され240年を経、我が国においても100年以上の歴史をもつが、それだけに障害児教育全体の問題を先取りしてきたともいえる。そういった意味で、本書は聴覚障害児教育関係者のみならず、知的障害、情緒障害、コミュニケーション障害などその他の障害児教育また、福祉・リハビリテーションに関わる人々にもぜひ、一読をお勧めしたい。それは、それぞれの障害や分野が今後直面するであろう多くの問題を提示しているからである。

例えば、「聴覚障害児の唇にことばを、手に職を」と言われてきたほど、言語指導は聴覚障害児教育の大きな柱であった。この言語指導の方法の変遷が、第3章にわかりやすくまとめられており興味深い。昭和30年代の教師が用意した語彙・文法指導を中心とした方法が、昭和40年代に東京教育大学（現筑波大学）で開発された「トピックス」と呼ばれる、子どもから出てきた興味ある話題をめぐっての非言語的・言語的やりとりによって言語を習得してゆく方法へと変化してゆく。そして、昭和50年代には全国の聾学校でも子どもの心の動きを重視した「話し合い活動」へと展開してゆく。

このような進展は、コミュニケーション障害の分野で1970年代後半から言われ始めた言語の使用・機能面を重視した「語用論革命」と呼ばれる言語指導の大きな変化を先取りしていたものということもできる。更に、子どもの心の動きを重視する考え方は、最近、発達心理学の分野で盛んに研究が行われるようになった、子どもの他者の意図理解としての「心の理論」の発達の問題意識を内包していたともいえよう。我が国で進展したこのような指導方法開発の動向は世界的にも高く評価されるのであろうし、子どもの心の動きや気持ちを重視した、この方法による大きな成果はコミュニケーション障害の分野においても今後様々に貢献することが予想される。

また、生活指導のあり方などについても多くの経験に裏付けられた興味深い記述がみられる。「些細なことでもめごとがあったりすると、つい時間的に結論を急ぐあまり、状況を客観的に考えさせるとか、お互いに立場をよく理解させることをしないで、おとなの都合で判断し、『あなたが悪いのだから謝りなさい』などと間髪をいれず指示を与えてしまいがちである。こうした対応ではなく、『こう思うけど、相手はどんな気持ちなのだろうか』自分の頭で考え、判断できるように間合いをもったゆとりある援助の仕方を工夫することが大切であろう（第6章104P、一部省略）。」これらから示唆されるのは、近年盛んになりつつある学習障害児や情緒障害児へのソーシャルスキルトレーニング（SST）を行う際、既成の行動（感謝する、謝るなど）をマニュアル的に教えてゆくのではなく、相手や子どもの気持ちの理解を援助することの必要性についてである。

聴覚障害児教育における高等教育や職業教育の現状と問題も大変わかりやすくまとめられている。例えば、1993年の調査では、全国で168の学部聴覚障害者が在籍しているという。しかしながら、その支援体制は、手話通訳者や、ノートテイクナーなどの個人的なボランティアに依存していることが多く、著者は公的な支援

体制の整備の急務を訴えている。また、1988年に大学、大学院に在学中か、卒業後10年以内の聴覚障害者109名のうち、23名が一度は受験自体を断られて経験をもつという事実も示されている。この事実は我が国における障害者の高等教育の問題を端的に示しているであろう。

本書は最後に、「課題と今後の展望」によって結ばれている。その中で、アメリカの実状が紹介され、「最も制約の少ない環境」の解釈として、政府が基本姿勢を可能な限り通常の子どもと同じ場で教育を受けることとしているのに対して、聾教育関係者は聾学校こそが最も制約が少ない環境であると主張し、両者が対立している様子を紹介し、この国の教育の現状はこの教育

の世界的動向を象徴している、と述べており、これはまた、障害児教育全体にも共通する、障害という概念の根本問題を提示しているともいえよう。

そのほか、歴史のある早期教育や母親・家族援助、コミュニケーション手段の問題、通級指導教室と通常の学級との連携、重複障害児への対応など、他の障害にも関連する問題点が展開されている。

今後、本書の概論の基に、例えば、統合教育の在り方や、心を育てる教育の方法など、聴覚障害児教育が培ってきた成果を各論的に刊行されることを大いに期待したい。

(筑波大学心身障害学系 長崎 勤)